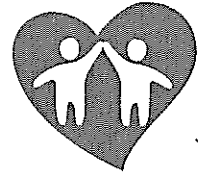


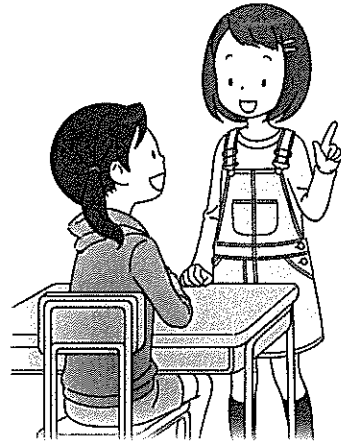
約束



けんきよな心で

携帯電話やスマートフォンけいたいの使い方が原因で、

友だちとの間に問題が起げんいんることがあります。そうならないよう、わたしたちはどんなことに気をつければよいのでしょうか。



—金曜日 夕方—

「ねえ、日曜日、社会の宿題を調べに図書館へ行かない？」

結衣ゆいが陽菜ひなに言った。二人は、社会科の宿題で、『わたしたちができる環境保護かんきょうほご』について調べていた。陽菜が答えた。

「しめ切り、来週だったね。分かった。日曜日、図書館へ行こう。」

「うん。約束だよ。」



鈴木すずき 陽菜ひな

—日曜日 朝—

「ねえ、陽菜、今日はじゆくも休みだから、家族みんなで買い物に行かない？」

母からのさそいに心がゆれたが、結衣との約束があったので、母のさそいを守り、約束の時間に図書館へ行った。しかし、十分待っても、二十分待っても、結衣はあられもない。わたしは、結衣にメールを送ったが、いつまでたっても返信がない。電話を試してみても留守番電話るすばんになった。



友だちとの約束って、
みんなにとっても大切だよ。

「いつもならすぐに返信があるのに……。来週しめ切りなのに、約束をやぶるなんてひどい。」
わたしは、夕方まで一人で調べた。

—日曜日 夜—

楽しそうに帰ってきた家族を横目に、わたしは、ますますおもしろくない気分になった。
そして、友だちと作ったインターネット上の掲示板に、結衣のことを書きこんだ。

結衣ってとってもひどい
んだよ！ いっしょに図
書館へ行こうって結衣か
ら約束したのに、約束や
ぶるんだから！！
かなりひどい！

ひな菜

えー本当??
それって信じられない
(^_^)

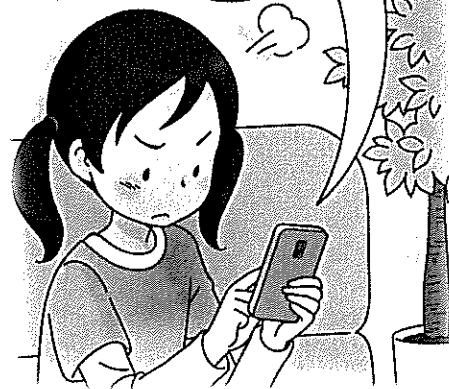
とも子

たいへんだったね
(>_<)

こはる

みんなも結衣には、気をつ
けたほうがいいよ！

陽菜



田中 結衣

—日曜日 朝—

(今日は、陽菜と十時に待ち合わせ。ちょっと早めに出ようかな。)と、思っていたとき、
母の大きな声があった。

「おばあちゃん、大丈夫？ おばあちゃん！」

かけつけてみると、祖母はたおれていて、意識がなかった。救急車で運ばれ、緊急手術が行われた。



陽菜さんは、なぜ掲示板に
書きこみをしてしまったのかな。

—日曜日 夜—

手術は無事に終わり、安心したわたしは家に帰ってきた。

「もう十一時かあ。あつ、陽菜に連絡するの、わすれてた！」

あわててスマートフォンを手にしたわたしは、たくさんの着信履歴と掲示板の書きこみを見た。

「えっ？ 何これ？ なんてこんなこと書きこむの？ ひどい。」

わたしは、陽菜にメールをしようとして、その手を止めた。

（でも、陽菜に連絡をしなかったわたしも悪いな……。今日は

もうおそいし、あしたの朝いちばんにあやまるう。ちゃんと

理由を話せば、分かってくれるよね……。）そう思いながらも、

不安を感じて、なかなかねむれなかった。



そして月曜日の朝。

教室に入った結衣は、みんなの冷たい視線に気がついた。いたたまれない気持ちでいると、陽菜が登校してきた。結衣は急いで陽菜に近寄った。

「おはよう、陽菜。あのね、実は昨日……。」

「言いわけしないで！ どれくらい待ったと思うの。結衣とはもう話もしたくない。」

陽菜は強い口調で言うと、自分のつくえへ向かっていった。

（陽菜、ひどい。わたしの話も聞かないで。おばあちゃんのことでたいへんだっただから。）

結局、陽菜と結衣は一言も口をきかなくまま、下校してしまった。

陽菜が学校から帰ると、母が話しかけてきた。

「昨日、結衣ちゃんのおばあさんがたおれて、手術をした

そうよ。結衣ちゃんのご家族、たいへんだったんじゃない。」

(えっ!) 話を聞いた陽菜の心臓は、ドキドキしてきた。

「お母さん、わたし、結衣のところに行ってくる。」

そう言うと、陽菜は走って結衣の家に向かった。玄関の前に

結衣が出てくると、陽菜は思い切り頭を下げた。

「結衣、本当にごめん。昨日、結衣がおばあさんのことで

たいへんだったって聞いたわ。わたし、自分勝手すぎた。

それに掲示板にも……。本当にごめんなさい。」

なみだを流しながら何度もあやまる陽菜に、結衣はやさしく

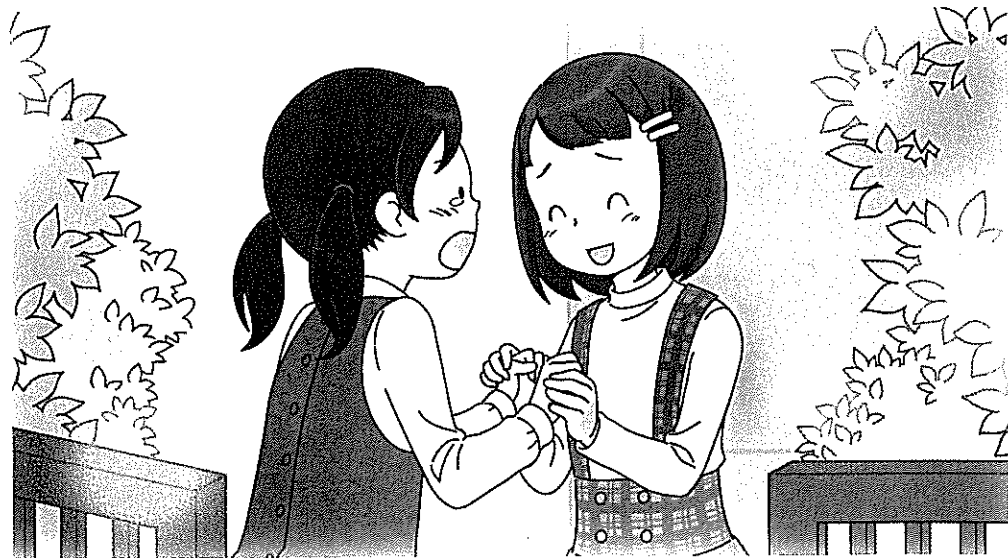
声をかけた。

「うん、分かった。もういいよ。わたしも連絡できなくて

ごめんね。また仲よくしようね。」

「ありがとう。みんなのごかいは、必ずわたしがとくからね。」

●編集委員会 作



15

10

5



相手のことをみとめて受けいれ、

よりよい関係をつくるためには、

どのようなことが必要か、まとめまじよう。



携帯電話やスマートフォンを利用した、

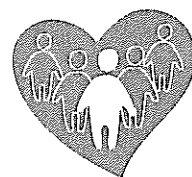
インターネットの正しい使い方について、

家族と話し合いまじよう。



結衣さんが、「もういいよ。」と言ったのは、
どうしてかな。

森川君のうわさ



かたよらない心

うわさを信じて、友達をきずつけてしまったことはありませんか。



「上手だね、この本立て。」

「わたし、森川君を見直しちゃった。」

「ニスまでぬってあるんだね。」

「作品展が終わったら、わたしに出来ないかしら。」

夏休みの作品展のときのことだ。みんなは、森川君が作った本立ての前で、森川君を口々にほめた。工作が苦手なぼくは、森川君がうらやましかった。

森川君は、ほめられてうれしそうだった。



作品展さくひんてんがあった二、三日後、ぼくは、学校の

帰りに、石山君たちといっしょになった。

「森川君もりかわの作った本立てを覚えてるかい。」

「うん、上手だったね。」

「あれは、本当は、森川君のお父さんが作ったんだって。」

5

「本当？ そういえば、森川君のお父さんは大工さんだったよね。」

石山君たちがふんがいして話すのを聞きながら、ぼくは変だなど思った。以前、ぼくは森川君の家へわすれ物をとどけたことがあった。森川君は、犬小屋にペンキをぬっていて、

「けっこう上手だろ。これ、ぼくが最初から一人で作ったんだよ。」

と、得意そうだった。そのとき、ぼくは、森川君は器用なんだなど思ったのだ。

だから、「それはちがう。」と言おうと思った。でも、言い争いになったらめんどうだと思ったので、だまっていた。

10

「森川君の本立ては、家の人を手伝ったものだ。」といううわさは、やがてクラス中に広がってしまった。しかし、みんなの関心は、近づいてきた運動会に向いていき、そのうわさは、いつの間にかわすれられていった。

15

そのまま何も起きなければよかったのだけれど……。

「ぼく」は、なぜ、「それはちがう。」と言えなかったのかな。



三学期になって、ぼくたちは卒業記念のオルゴールを作り始めた。図工の時間だけでは間に合わず、家でやってくることになった。

次の週の図工の時間、みんなは、森川君のオルゴールのふたのちょうこくのできばえに感心した。細かい花もよう、ほり方も上手で、まるでデパートで売っているオルゴールのようだった。

あのうわさが、またささやかれ始めた。みんなは、だんだん森川君を仲間外れにするようになった。

「おはよう。」

ある朝、森川君が元気よく教室に入ってきて、石山君^{いしやま}たちに声をかけた。すると、今まで話していた石山君たちは話をやめ、ピイツと横を向いてしまった。

いつも明るかった森川君も、だんだん無口になっていった。

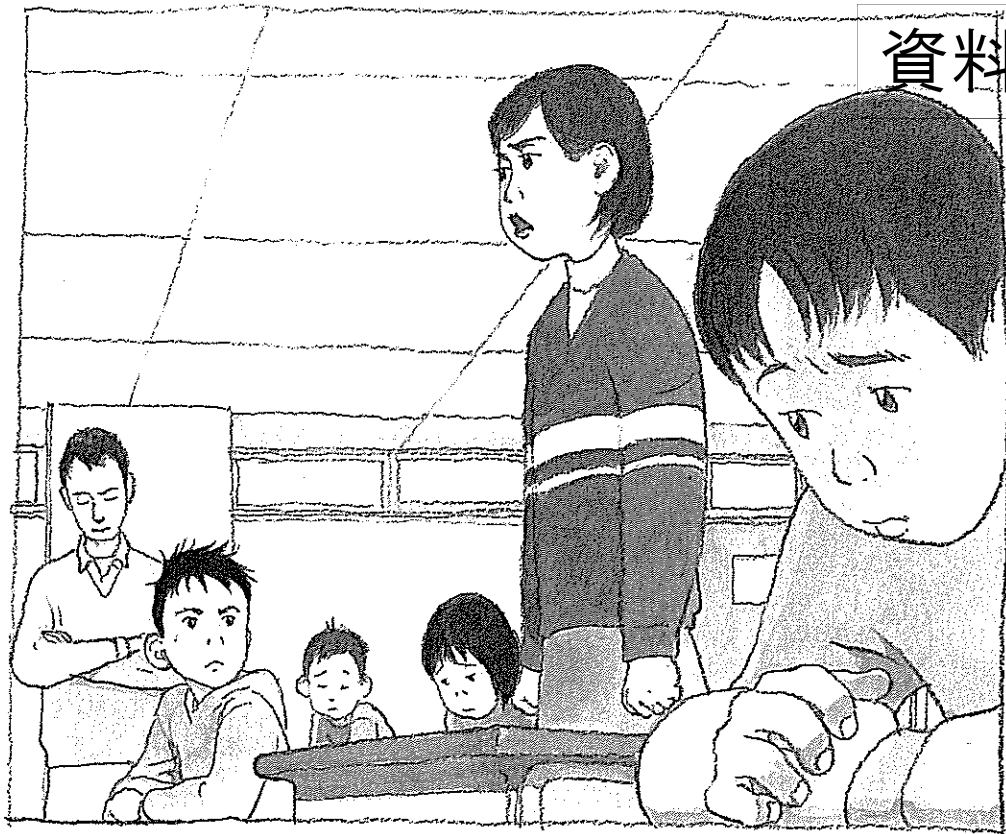
ぼくはこまってしまった。あるとき、石山君たちの話に対して、「それはちがう。」とはつきり言えば、うわさは広がらなかつたかもしれないのだ。今は、もう言い出せない。ぼくは、気が弱い自分を責めた。でも、心のすみには、「早く三学期が終わればいいな。」という、ずるい気持ちもあった。

そんなある日の帰りの会で、いつもはおとなしい順子^{じゅんこ}さんが、めずらしく手を挙げて、森川君のことを話し始めた。

「わたしの家は、森川君の家の近くです。わたしは、森川君が、休みの日に庭で何か作っているのを、よく見かけました。森川君は器用なんです。」

もりかわ
森川君が無口になっていったのを見て、「ぼく」はどんなことを考えましたか。





自分が発言しているわけでもないのに、ぼくは、真っ赤になった。ずるかった自分がはずかしかった。順子じゆんこさんはりっぱだと思った。

「本立もりかわてだって、オルゴールだって、わたしは、森川君もりかわが一人で作ったのだと思います。先生は、『どんなことでも、確かめずにうのみにしてはいけません。』とよくおっしゃいます。それは、『うわさで人を判断してはいけません。』ということにも通じると思います。確かめもしないで、森川君を仲間外れにするなんて……。」

順子さんの落ち着いた声を聞きながら、ぼくは、森川君の気持ちを想像した。そして、順子さんの発言が終わったら、ぼくも発言しなくてはいけない、と思った。

●編集委員会作

15

10

5



いじめのないクラスにするためには、どんな心が大切か考えましょう。



いじめのないクラスにするために、どんなことを心がけたり実行したりすればよいか、話し合いましょう。



「ぼくも発言しなくてはいけない」と思ったのは、どうしてかな。